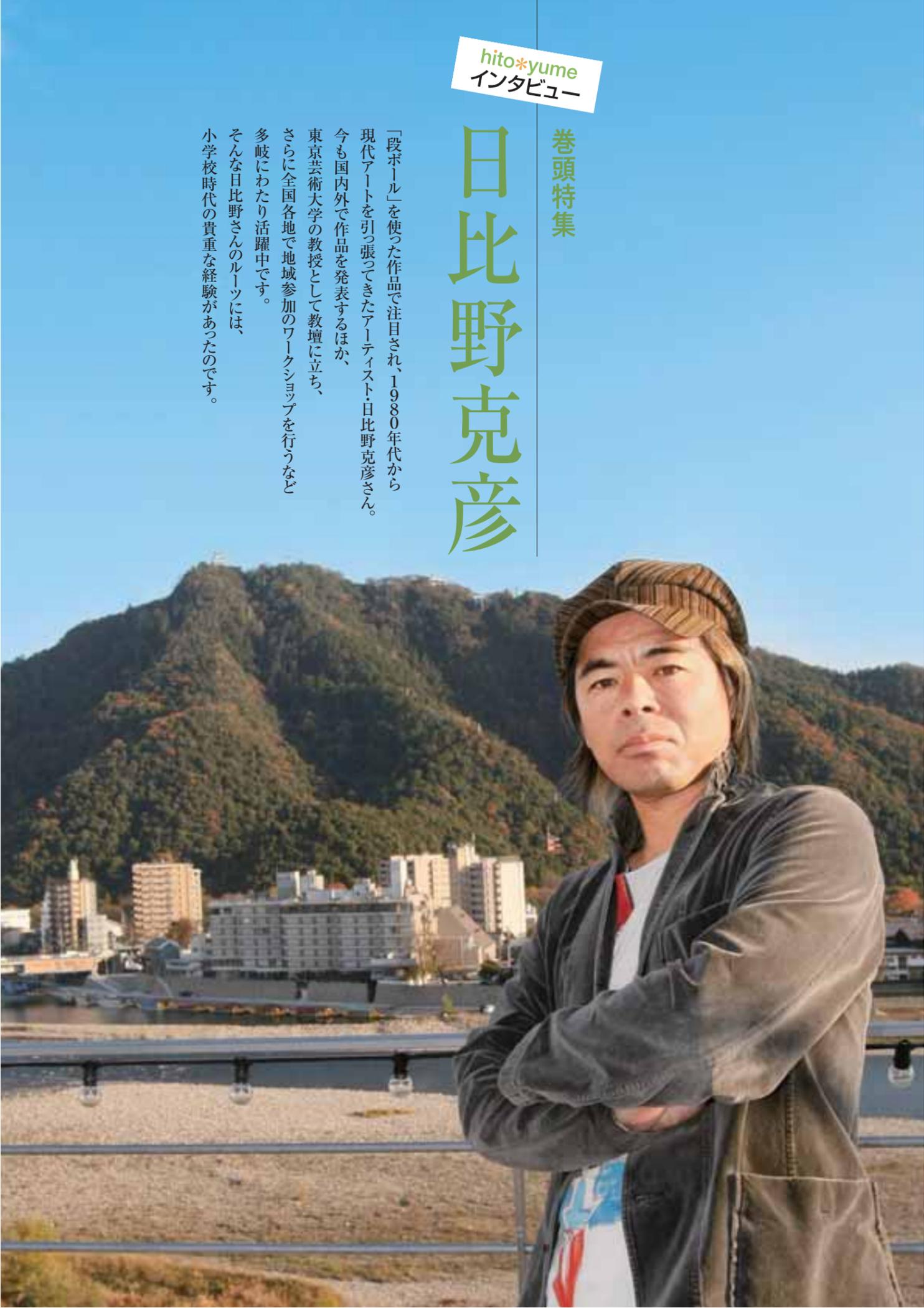


hito*yume
インタビュー

巻頭特集

日比野克彦

「段ボール」を使った作品で注目され、1980年代から現代アートを引っ張ってきたアーティスト・日比野克彦さん。
今も国内外で作品を発表するほか、東京芸術大学の教授として教壇に立ち、さらに全国各地で地域参加のワークショップを行うなど多岐にわたり活躍中です。
そんな日比野さんのルーツには、小学校時代の貴重な経験があったのです。



TOSHIBA
Leading Innovation >>>

情報セキュリティ対策、お済みですか？

安心して、教育に専念できる情報システム環境の構築をお手伝いしています。



中小規模企業向け PC 統合セキュリティソリューション

PC運用上手で、上手に運用!

情報漏えい対策とPCの資産管理／運用管理を1台で!!

「PC運用上手」は、パソコンの操作監視・操作制御、検疫ネットワークなど、情報漏えい対策に必要なセキュリティの基本機能をまとめて搭載。高度なIT専門知識がなくても、わかりやすいメニュー画面からの操作で、簡単に情報漏えい対策が行えます。

詳しくは

- ▶ ID管理
- ▶ 操作監視
- ▶ 操作制御
- ▶ ソフトウェア配付
- ▶ 検疫ネットワーク
- ▶ 不正PC検出・排除
- ▶ 解析・通知
- ▶ PCデータバックアップ
- ▶ 資産管理
- ▶ システム管理



高性能
スマート

信頼性に優れた
インテル® Xeon®
プロセッサ X3330 搭載

※全ての機能をご利用いただくには、PC 運用上手のほかに「ウイルス対策ソフト」、「暗号化ソフト」が必要になります。
●「PC運用上手」は株式会社東芝の登録商標です。●Intel、インテル、Intel logo、Intel Inside、Intel Inside logo、Xeon、Xeon Inside は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。●Microsoft、Windows、Windows Server、Active Directory は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。●本資料掲載の商品の名称は、それぞれ各社が商標として使用しているものがあります。●本資料記載の会社名、製品名には必ずしも商標表示(®、TM)を付記していません。●本資料の内容はお断りなしに変更することがあります。(2009年11月現在)

TOSHIBA

株式会社 東芝
PC&ネットワーク社 サーバ・ネットワーク事業部
〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1
Email: pcman@ieg.toshiba.co.jp

東芝情報機器株式会社
プラットフォーム・ソリューション本部
〒135-8505 東京都江東区豊洲5-6-15 (NBF豊洲ガーデンフロント)
Email: pcman.info@toshiba-tie.co.jp

学校の中に、つねに仲間づくりや 助け合いがあった

入院中の病室に、
先生やクラスメートが毎日のように訪ねて来てくれた



独自のだった小学校の環境

— 日比野さんは岐阜市の岐阜大学附属小学校の出身ですが、小学校時代に長い期間、病気で休まれていたそうですね。

小学校2年生の冬から3年生夏までの8カ月、小児腎炎にかかり学校を休みました。だから少しおとなしい性格になってしまっていたんだけど。

でも、それを先生方がきちんとフォローしてくださったのがとてもよかったです。入院中も毎日のように、数人ずつクラスメートを連れて見舞いに来てくれました。僕もみんなに会えてうれしかったですし、学校の様子も聞けたし、顔も忘れずに済んだ。退院した後も、みんなで僕を家から連れ出して先生の家に遊びに連れて行ってくれたり、僕を外へ引っぱり出してくれたんです。

— 先生や同級生のおかげで、ブランクがあっても溶け込めたんですね。

大学の附属小学校だったこともあって自由にカリキュラムをつくるような環境だったんですね。杓子定規に科目をやっているだけじゃなくて「仲間づくり」とか「助け合い」というキーワードがいつも学校の中にありましたから。ある意味、僕のような同級生がいることがほかの子たちにとって勉強の機会になったのかもしれない。単なる優しさじゃなくて、仲間がそういう状況になったときにまわりはどう動かなければいけないのかを、先生はみんなに学ばせていたんだと思います。

学校で毎日いろいろなことが起こるでしょう。捨て犬や小鳥のヒナを拾ってさちやったりして。そういうのをクラスで飼っていましたから。犬がいなくなっちゃったら授業はやらずに、一日中みんなで探したりしてね。

日常の出来事が教材に

— 先生がとても実のある教育をされていたようですね。思い出に残る出来事がありますか。

1年生のとき、みんながバス停前の銀

行を休憩所代わりに使ってしまった。備え付けのお茶まで勝手に飲んで、銀行から苦情が来たことがあるんです。堀井先生という方が僕らの担任でしたが、頭ごなしにしかることをせず、なぜいけないのか説明したうえで、その出来事を文化祭の創作演劇にして、銀行の人たちも招待して上演したんです。銀行への謝罪と子どもたちの反省を込めた劇でした。

それが今でも心に残っていますね。もし、ただしかられただけだったら嫌なこととして忘れてしまっていたでしょう。

— 日常の出来事を教材にしたんですか。それは単にしかられるよりずっと印象に残るでしょうね。

日常がお芝居になって、それでメッセージを伝えるってことがね。今でもちゃんと覚えているってことは、子ども



小学校2年生のときに家族旅行で名古屋へ出かけたときの1枚

ている実感を味わえるから」という言葉聞いて、ああ、生きるっていうのは表現することだと気づいたんです。じゃあ自分は絵で表現しようと思いついて、それからの高校時代はひたすら絵だけを描きつづけましたね。

— 高校1年生でもう明確に進路を見えたんですか。驚くほど迷いがなかったんですね。

とにかく自分のことを表現しなくちゃ駄目なんだ、と強く思っていましたから。それまではサッカーをやっていたが、絵のためにピシッとやめた。もし当時、Jリーグがあったらサッカーを続けていたかもしれませんけどね(笑)。

ワークショップに

取り組む理由

— 現在、日比野さんはご自身の創作だけでなく、各地で地域参加のプロジェクトやワークショップを意欲的に行われています。その理由は何なのでしょうかね？

普通に美術館などでやる展覧会って、いつか終わりがあって作品はどこか別の所へ行ってしまうでしょう。僕が今あちこちでつくろうとしているのは、地

毎日のあらゆる経験の中から 感性を磨くことができた

日常を観察する力や表現する力がついたのは、
担任の先生方の臨機応変な対応のおかげ

心に相当ワクワクして刺激的だったんだと思います。授業の内容よりも、そうやって先生が毎日起こることに臨機応変に対応してくださったことが、生き生きしているクラスの雰囲気をつくったと思うし、子どもたちが先生を信頼することにもつながったんだと思います。

それから3年生の担任だった近藤先生も面白かった。「毎日放課後にひとつ詩を書いて提出しなさい」と言うんですよ。そうするとみんな朝から何を書こうかなと、詩のネタを探しているいろいろなものに目を配るようになりますよね。日常を観察する力とか、些細なことを取り上げて表現することとか、客観視することとか、先生のおかげでいろいろな感覚がそこにはぐくまれた気がします。

先生方とは今でもお付き合いがありますが、すごくいい経験だったと思うし、とても感謝していますね。

— 日比野さんの美術の土台は、そんな体験からもつくりられているのでしょうか。

図工の授業だけでなく、毎日のあらゆる経験の中で身につけたものがすごく多いと思いますよ。

今でも美術の先生たちと話す機会

『あの子どもはどう感じているのかな』と、外向きに視線を変えていきたい

少人数のグループワークで自分にしか視線が向いていない子どもを変えていかなくちやと思う

でもそういう子は元気な絵は描けなくても、本当はこちょこちょ描いたりするのが好きだったりするんです。元気な絵ばかりがいいわけじゃなくて、細かい絵もその子にとっては大切な表現。だからそれをほめてあげないといけない。絵ってほめられないと誰も描きたくなくなるから。けなされたら描く必要ないですもん。1+1=2じゃないから、駄目

ミニコミュニケーションが欲しいんです。絵はちゃんとほめることが大切——子どもたちのつくる作品はどう評価されますか。世間一般では「子どものつくるものは、元気で型破りがいい」などと言われがちですが。

元気なのを描ける子はもうどうにでもなる。放つといつも勝手に走っていきますよ。大事なのは引込み思案で内向的で描けない子もいるんだということ。そういうおとなしい子たちにこそ美術が必要なんです。そうした子がいたら、ちゃんと声をかけてあげないといけないし、スタッフにもあの子をちゃんと気にしてあげてね、とお願いしておく。放っておくとふらっと帰ってしまった。そうすると二度と来てくれなくなってしまうんです。

域の人と一緒にモノをつくることなんです。みんなで一緒になってモノをつくり、それを通してコミュニケーションを生み出したい。その手段としてワークショップを使っているんです。最初にかかわる際に、「やるからには続けたい」と言います。縮小してもいいから続けていこうよ、と。だから終わらずに毎年継続していく。僕の地元の岐阜をはじめ水戸、福岡、横浜、鹿児島と、ずっと続いていきますね。

——地域の人たちもまた続けたいと思っているわけですね。

伝統的な祭りと同じなんです。今、行政の開くようなフェスティバルはあっても、地域に密着した祭りは減っています。だからワークショップで交流を広げたいという思いがあるんですよ。子どもたちにとっても参加することで、しつけだとか先輩を敬うとか、そういうことを学べる場になるんです。

——実際にワークショップで子どもたちと接する機会も多いと思いますが。

子どもも大人も学生もいろんな人が来ます。年齢層が幅広い方がいいん

美の答えはひとつじゃない。勝ち負けもない

ワークショップにはいろんな年齢層がいて、たくさんの感性が混じって、まったく違うものができるのがいい

です。学校の授業だとまわりは同じ年齢の子しかいなくて同じことをしている。かなくちやいけない。でもワークショップのようにいろんな年齢の人が集まれば、まったく違うものができる。とくに「美」って算数みたいに答えはひとつじゃないから、同じリングを描いても、みんなばらばらの絵になるし、勝ち負けもない

な絵というのではない。「面白いね」でも、「変だけど味があるね」でもいい。誰かがちゃんとほめることが大切なんです。

——ワークショップや大学での講義などを通して、これからの教育について気づかれたことがありましたらお聞かせください。

今の子たちって、「おれはどう見られているのかな」と自分にしか視線が向いていない子が増えてる。それを「あの子どもはどう感じているのかな」と外向きに変えていかなくちやいけないと思います。それには僕が小学生のときのように、4、5人くらいのグループで交流できる場をつくるのがいんじゃないかな。僕も小学校のグループワークの時間はよく覚えているんですよ、友だちの顔やそのときの様子をね。

コラム

ワークショップ

各地で続けられるワークショップや地域住民を巻き込んだアートプロジェクトも、日比野さんの取り組み大切な活動だ。毎年形を変えつつ開催され、その土地ごとの特色や人々の思いを生かし、世代を超えたコミュニケーションや故郷への誇りを取り戻すことにもつながっている。

故郷の岐阜市では、暦の数字をあしらった和紙行灯をボランティアが共同制作、それを載せた屋形船を夜の長良川に流す風雅なプロジェクト「こよみのよぶね」を毎年冬至の日に実施。太宰府では、段ボールで36艘の「FUNES(舟)」をワークショップで制作。さらに横浜開港150周年記念イベント「開国博Y150」横浜FUNESプロジェクトに発展。また水戸市では市民の参加による「一人万博」、さらに熊本市、金沢市、鹿児島市、新潟市、十日町市など、全国各地で多彩なワークショップが継続中。



「こよみのよぶね」の和紙行灯制作現場(左は日比野さん)

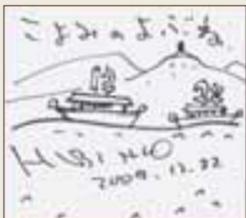


2009年「こよみのよぶね」

僕自身大学で今教えているけれど、先生たちは大学で教わったやり方ではなく、先生たちは自分が小学生の時に教わった雰囲気を出して授業で実践しているってほしいと思います。

日比野克彦(ひびの かつひこ) プロフィール

アーティスト。1958年岐阜市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大学在学中に段ボール作品で注目を浴び、国内外で個展・グループ展を多数開催するほか、パブリックアート・舞台美術など、多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを多く行っている。



考える絵本④『美』
大月書店 1,365円